

2026 年度大学院入試
後期日程（一般入試）

【問題】

ジェンダーレスファッションは、「多様性の尊重」として肯定的に評価される一方で、「ジェンダー差異の不可視化」や「記号化」といった問題も指摘されている。

これらの評価を踏まえ、ファッションにおけるジェンダーレス表現の意義と限界について、あなたの考えを論じなさい。

【出題の意図】

本設問は、ジェンダーレスファッションを単なる流行現象や価値判断の対象としてではなく、社会的・文化的・記号論的観点から批評的に考察できるかを測ることを目的とする。

近年、ジェンダーレス表現は「多様性の尊重」「自己表現の自由」といった肯定的文脈で語られることが多いが、一方で「ジェンダー差異の不可視化」「表現の記号化・均質化」などの問題も指摘されている。本設問では、こうした相反する評価軸を同時に扱う思考力を確認することを意図しており、特に以下の点を総合的に評価するものである。

- ・ ファッションを社会・文化・記号・市場が交錯する領域として理解出来るか
- ・ 規範と差異の問題を理論的に扱えるか
- ・ 単純な価値判断に陥らない批評的思考を持つか

【解答例】

ジェンダーレスファッションは、従来の服装規範を相対化し、多様な自己表現を可能にする点において大きな意義を持つ。衣服は身体を覆う機能物であると同時に、社会的アイデンティティを可視化するメディアであり、着用者の属性や価値観を象徴的に伝えてきた。そこでは従来「男性らしさ」「女性らしさ」といった二分法的なジェンダー観が前提とされ、ファッションデザインを構成する要素である「形」「色」「柄」「素材」に至るまで性別と結び付けられてきた。ジェンダーレス表現は、この固定化された意味や秩序を問い直し、身体やアイデンティティの多様性を前提とする視座を提示した点において評価できる。特に性自認や身体的特徴が既存の区分に収まらない人々にとって、選択肢の拡張は自己肯定や日常的な抑圧の緩和に寄与する。また、市場や教育の領域においても、サイズ設計や商品分類、売り場構成など制度的側面の再考を促し、服飾文化全体に影響を及ぼしてきた。

しかし、その評価には限界も存在している。第一に「ジェンダー差異の不可視化」の問題である。差異を希薄化し中性化を志向する論調は、一見すると平等や自由を強調するが、

同時に歴史的・社会的文脈を覆い隠す危険性を孕んでいる。例えば、女性が獲得してきた装いの政治性や、クィア文化が培ってきたスタイルの文脈が、単なる「中性」という抽象的概念のもとで一様化される可能性がある。第二に「記号化」の問題である。ジェンダーレスが特定のシルエットや色調に画一化されると、本来の開放的意義とは逆に、それ自体が新たな規範として機能し始め、結果として多様性を掲げながら、実際には均質なイメージを反復するという逆説が生じ、そこには商業主義との構造的な矛盾が露呈する。つまり、差異を越えるはずの表現が、新たな類型へと回収されるのである。

したがって、ジェンダーレス表現の本質的意義は性別の消去ではなく、複数の差異が共存し得る条件を整える点にあると考える。重要なのは「中性化」ではなく「選択と解釈の余白」の確保である。具体的には、身体差や文化差を前提とした設計思想、多様な語りや経験の可視化、さらには着用者の実践や解釈行為を中心に据える評価軸が求められる。ファッションは既存のカテゴリーを解体し得る批評的な力を持つ一方、容易に新たな記号へ回収される両義性を持つ。それゆえ、その意義と限界を自覚し、差異を抑圧するのではなく、関係を再編する視点こそが、今後のジェンダーレスファッションをより実りのあるものにすると結論づけられる。